# 生活



山口 **令司** 元國學院大學栃木短期大学教授

小学校生活」編集委員



# 子どもの心に響く 読んで楽しい, 新・教科書づくり

### ●子どもにとっての「生活科』 - その働き(役割) -

平成生まれの新教科『生活科』も、はや30年。指導に携わる教師達の中にも、自分が低学年の頃に『生活科』を学んできた人達も多々おられることであろう。そして、30年前の子ども達も今の子ども達も生活科の授業は大好きなのである。なぜなのだろうか。

その秘密について、同僚や有志の仲間達と今一度、子どもの目線に立って思いっきり想像し語り合ってみてはどうか。そうすることによって、多分、その語り合いの中から様々な命題が浮かび上がってくるであろう。

その中でも重要な命題として**「子どもにとっての『生活科』-その果たす役割とは何か」**といった、いわば生活科の原点ともいうべきテーマがあげられようか。そして、そのことが新たな生活科の創造に繋がる原動力となっていくはずである。

ここで、生活科という教科が含んでいる(学習活動によって得られる)様々な教育的価値としての主なる要素を取り上げてみたい。

### i) 気力と行動力を育む

活動体験を通して学ぶ生活科の諸活動は、旺盛なる好奇心の発揮、

- 物事や事象への興味関心を抱く。
- 確かめ、実感し納得する。
- 結果の習得~その喜びの味わい。
- 次への挑戦意欲の喚起。

などを容易にもたらす働きを内包している。

#### ii) 思考回路の基礎を培う

自分が描く願いや目的々行動の実現には、必ず "気づき・考える" とか "探す・調べる" などといった行為が伴う。そして、それ等の行為には以下のような思考活動が必要となってくる。

- 見る~聞く~調べる。そして、判断する。
- 「先ずは…」 「次には…」 「そして…」 などとプランを立てる。
- そのために必要な事柄(資料集め、作業内容の想起、手順の確認 その他諸々)について考える。
- 活動の見通しを意識する。
- "決める" 力の発揮。
- プロデュース感覚を磨き、なりゆきの状況を意識する。 などを通して、次第にその子らしさの〈ものの考え方〉の思考回 路の基礎が形成されていく。



### iii) 心情の啓発と道徳性の涵養

物に直接触れる・人と直接会話したり作業したりする・生き物や植物を育てたり世話をしたりする。だからこそ、そこでしか得られない心の働きや交流の密度が生まれてこよう。その結果、

- ものやひとに対して、慈しむ心が育まれていく。
- 優しさと労り、そして物事に接する素直さや我慢強さが培われていく。

以上 i) ~ iii) にかけて、生活科の学習活動がもたらす役割の主なものを挙げたが、これらのことは子ども達の成長に必要不可欠なものばかりなのである。

### ● 2020 年度版の教科書に寄せて

『学校図書』の教科書は、必ず"子どもの目線に立つ"という姿勢を貫こうということが、会議での合言葉となっている。もちろん、今回もその姿勢で編集してきたつもりである。

では、"子どもの目線に立つ"ということは具体的にはどのようにすることなのだろうか。

私達は、主に以下の点に心がけて編集を試みてきた。

- 「読んで | 「見て | 「やってみたくなる | ようなページに仕立てよう。
- テーマについて、活動のし方が分かり、自分なりのイメージが湧き、活動意欲が駆り立てられるようなページに仕立てよう。
- 学び方のコツが分かり、自分で試みたり確かめたりして成果が実感できるように誘おう。
- 活動を手助け出来るように、様々な資料を沢山提供しておこう。

そして、子ども達の心に食い込むような素材の開発や場面展開の"新鮮さ"についても意識して編集への挑戦に心がけてきた。

こうした指針のもとに、具体的な単元の展開案を作成していくとき、そこにどのような子ども達の知的好奇心のゆさぶりが期待されるものなのかとか、学習活動を推進するために必要な次のような"心の動き"に注意して紙面構成を図ってきたつもりである。

#### 【呼びかけの文・挿し絵・写真等への配慮として】

- ア. その紙面の中に、どのような「気づき」を期待しているのか。
- イ.はたして、その紙面を読んだとき、実際に見に行きたくなったり探したくなったりする感情や情動が誘発されるのか。
- ウ. その活動を通して、子ども達の心にどのような「考え方」や「感じ取り方」がもたらされるものと期待しているのか。

このように、様々な形の編集へのこだわりを意識しながらも、その中で最も重視したことは問題解決に不可欠な"必然性の連続"をどのように図るのかといったテーマへの答えの出し方であった。

これはまた、無理のない場面展聞の構成のあり方の追究であり「その時、子どもはどう考える?」とか「その次には、どう考え行動するのだろうか…」とかいった視点からの呼びかけ文やリード文の吟味を重ねることでもあった。





## みんなと学ぶ **小学校生活**

### 【上巻の特色】

「上巻」は、一年生を対象としての編集に心掛けた。そこでのコンセプトは、

- ア. 学校生活への期待感と安心感をもたらすように配慮する。
- イ.何ごとも"慣れ・馴染む"ことから始まることを重視する。
- ウ.「見ること」「気づくこと」そして「考えること」などは、〈今を、ありのままに〉から次第に〈より詳しく・より正しく・よりていねいに〉などといった認識の階層性を培う基礎づくりを大切に展開させる。
- エ. 行動力の向上のために、関わる対象(もの・ひと・事象等)に含まれている〈良さ〉とかく暖かさ・温もり・優しさ〉等をたっぷりと味わえるような描写のし方に留意する。

などを意識した編集となっている。

### 特色

▷入学当初における生活上の様々な不安感を解消させ、新しい環境に慣れ・親しむための「スタートカリキュラム」のページを新設した。

▶ここでは、『みんな なかよし いちねんせい』と題して、

- · 「あいさつできるよ」 · 「きちんとおけるよ」
- ・「ちゃんとできるよ」・「こまったなどうしよう」
- · 「なかよくなりたいね」 · 「やってみたいな」

などと、そのいずれもが子ども達の学校生活に必要な事柄や場面と、対応した時の身の処し方につい

て「ぼくできるよ。わたしだってできるよ」といった形で紹介している。

▷これらのページでのメッセージは、子ども達が「明日も学校へ行くのが楽しみだ」といった、思いを抱くことを願ってのものである。



### 特色包

▷「家族の一員としての自分、その成長への自覚」は、生活科が扱う大切な学習活動のひとつではあるが、その展開の具体策には各家庭の事情もあり、また学習者が一年生ということもあってなかなか困難を伴っているようだ。

▶ここでの一つの試みとして、展開のベースに『ありがとうがいっぱい』というモチーフを掲げ、身近で展開される(あるいは、自分が行う)様々な活動の具体を通して、彼らの心の中に「ありがとう…」といった感謝の気持ちが自然に湧いてくることをねらっての試みである。

▶その場合の秘訣として、家の人達が日々行っている様々な仕事を観察しながら、「その行為は誰達のために行っているのだろうか」を考えさせることから始まり、やがて自分も進んで家の仕事に取り組むことによって家の人たちから「助かるわー」と感謝されることの喜びを味わうことへと発展させていく。

▶この一連のプロセスを通して、より良い生活とは共に助け合い、感謝しながら営む日々のことだと気づいていく自分へと変身(自己実現)させていく単元となっている。



### 【下巻の特色】

下巻は、二年生を対象にした編集であり、配慮したこととして、二年生の持つ発達特性を存分に活かすためには単元展開をどのように進めたら良いのかを考え続けてきたことである。

言えることは、二年生は一年生に比べてその行動力に格段の進歩が見られることである。いわゆる足腰が随分としっかりしてきているものと言えようか。彼らの培われた"力強さ"に負けないような発想と内容を保障しなければ彼らの心は教科書から離れてしまう。

## 特色③

- ▷「まちたんけん」「わたしたちの野さいばたけ」「生きものと友だち」等々、どの単元をとってもそれぞれの中に固有のダイナミズムが認められるが、紙面の都合で「作ってあそぼう・動くおもちゃに含まれる"良さ"を紹介したい。
- ▷ここでは、子ども達の"工夫心"を掘り起こし、満足のいくまでチャレンジしながら目的を達成させようとする活動の展開であるが、そのプロセスの中で扱う対象物の固有の性質に気づき、それをどのようにしたら自分が願う目標に到達するかといった内容である。



- ▶そこには、自分が選択した材料の性質を巧みに引き出し、組み替えたり組み合わせたりしながらより良いものを作るための試行錯誤の営みが含まれている。そして、自分の願いをかなえるためには今まで気がつかなかった試みを生み出す知恵の働きも発揮されることになる。
- ▶また、子ども達の活動を触発させるための様々な玩具の紹介とその作り方のヒントが「ものしり ノート」の中にたっぷりと紹介されており、どの子も必ず制作活動に没頭できるように配慮されている。

なお、上巻・下巻共に『生活科学び方図かん』が載せてあるが、ここに書かれている各項目の内容は、 生活科の学習に役立つだけではなく、学年を越えて他の教科を学ぶ時にも必ず役立つものを選んで 記載しておいた。

それにしても、今回の教科書の仕上がりはスッキリ感が漂っていて、手にした子ども達はきっと 夢中になってページをめくり読みふけるに違いない。

### 【最後に】

紙面に登場する 4 人のキャラクター(あおい・ゆい・りんたろう・そうた)は、下巻 p.100 ~の「これからの自分」のところで書き綴っているように、この 2 年間の『生活科』で繰り広げられた様々な活動体験を通して得られる夢や希望、あるいは優しさや勇気、そして「決める心(力)」などといった"ひととしての心もち"のありようが、より確かなものへと成長していくことを示している。

それは、読者である子ども達の成長への期待を代弁しているものに他ならない。重ねて述べるが、生活科の学習活動はどの子にも必ず学びから得る固有の価値観が身につく教科なのである。

(山口 令司)

